慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代のアンチテーゼ : 米文学にみるアーミシュの生き方 (補遺)
Sub Title	An antithesis of the world : the Amish way of life as written in American literature (Part II)
Author	山本, 晶(Yamamoto, Sho)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1996
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.70, (1996. 6) ,p.209(18)- 226(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00700001-0226

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代のアンチテーゼ

米文学にみるアーミシュの生き方

（補　遺）

山　本　　晶

［前　説］さきに発表した標題の論考（『藝文研究』第67号，1995年３月10日発行，289-316頁）は，編集委員の許可を得て通例を遥かに越える紙数を費したにもかかわらず，興味深い点を多く残さざるを得なかった。ところが，奇しくも発表以後，アメリカで起きたオクラホマ州連邦政府ビル爆破事件（1995年４月19日）を契機に，環境問題への関心の昂りも加わって，かの絶対平和主義を標榜し，近ごろ謂うところの「地球にやさしい」生き方を夙に実践してきたアーミシュの存在が遽かにマスコミの注目を浴びることになった。更に『アーミッシュに生まれてよかった』の訳者で玉川大学教授の池田智氏による研究書や，ペンシルヴェニア州ダッチ・カントリーの出身で1972年から日本を拠点にアーリー・アメリカンの菓子や家具雑貨などを商う会社社長ジョウゼフ・リー・ダンクル氏による案内書が出るに及んで，日本の一般読者がアーミシュとはどういうものかを知る利便が飛躍的に増大することにもなった。つい１年前には想像することもできなかった事態である。もともと本稿はアーミシュを概論的に紹介するのが目的ではなく，米文学の特定３作品にその生き方の特徴がどのように描かれているかを指摘し，これに解説と考察とを加えることにより，「現代のアンチテーゼ」を提供するところに意図があったのであるが，如上の事態になったからには，今回のテーマをひとつにしぼり，これに基づく考察を補遺の形でまとめるにとどめたい。参考資料のリストについても，①さきの発表時までに目を通していたが紙幅の都合で挙げ得なかったもの，②発表以前に出版されていたが入手すること叶わず，その後入手したか披見

の機会を得たもの，③発表以後に出版されたものを，これまた補遺の形でまとめて末尾に付すことにした。もっとも，今回の論考（補遺）が参考資料（補遺）にのみ負うわけではなく，依然として前回の参考資料にも負うていることは言うまでもない。なお，作品タイトルは第１次資料の掲出順にそれぞれ『プレイン』，『プラウド』，『目撃者』と略記する。

S－I　前回の論考を読んで学生が発した質問のひとつは，アーミシュ村の若者はどのように異性と知り合って結ばれるのか，というものであった。いかにも若者らしい疑問であり，今回はこれを主たるテーマとする。まずアーミシュ村の子供は，12歳になると馬車の手綱をとることが許され，16歳になると親から軽装馬車を与えられる。そこで日曜日の夕方，年頃の若者たちは――男も女も――自分の馬車を駆って「歌の会」に出る。これは歌を唱うだけでなく，昔から伝わるゲームやダンスもする集会である。ところで，かつてアメリカ人が利用したものの今は旧式になった陸水空にわたる輸送機関が，こんにち合衆国郵政公社の発行した40種の郵便切手シリーズ（1981-86）の図案になっており，内12種は各種の馬車である。アーミシュの馬車は，そのいずれとも異なる形をしている。よく見かけるのは，映画『目撃者』で，レイチェル母子が駅に出るときに乗った義父のバギーと同じ型で，座席部分に黒っぽい箱を載せただけのような１頭立て４輪馬車であり，もうひとつは前述のティーンエイジャー用ギグで，１頭立て軽装の無蓋２輪馬車である。このほか１頭立て４輪無蓋車も使えば，２頭立て無蓋４輪運搬車も用いる。いずれにしても車輪は鉄製で，ゴム製タイヤは認められない。児童向け物語『プラウド』の終わり近く，視力が衰えたために字が読めないという理由で密かにラジオのニュースを聴いていたケティの祖父を，父が見咎めてたしなめる場面があるが，後者はラジオを聴くのはゴム製タイヤを使うようなものだと述べている。もっとも，ゴム製タイヤを履いた４輪自動車が乗り心地や持続距離，速度などの点で馬車の比でないことはアーミシュも承知しており，じじつ，エッセイ集『プレイン』では，自動車の使用を認めるメノウ派の女性が持つ車に便乗

させてもらって，町に買い物に出かけている。自動車の所有や運転は禁じられているが，自動車で遊びに行くのは大好きなアーミシュもいるという。電話についても同様で，自宅に架設するのは認められないが，メノウ派の家にあるものを通じて伝言を依頼する方法は，すでに前回『目撃者』を取り上げたとき，レイチェルがボールティモアに住む姉に連絡をした場合にとられているのを見た。最近は屋外に共同電話を引いてみずから使用する例も見られるという。禁止の対象は自動車や電話の使用にはなく，所有にある。十戒のひとつ貪欲の罪につながるからである。『プレイン』の著者が「彼ら［アーミシュ］は変化に抵抗していない。ただ，変えたいと思うことについて選択をしているだけである」（伊藤礼訳）と述べているのは，的確な観察である。

S－2　さて，話柄を運ぶ馬車を若者のつきあいからデート，婚約，結婚へと至る道筋へ戻すことにしよう。はじめて1頭立て軽装の無蓋2輪馬車を与えられた若者の内には，道を高速で飛ばすことに快感を覚える者が出てくる。言わばオープン・カーのスポーツ・カーを飛ばすようなものである。戒律の厳しい社会だから若者が行ない澄ましているかと言えば，さにあらず，若者は世界中どこでも同じなのである。アーミシュは再洗礼派であるから，長じてみずから判断が下せる年齢に達したときに，洗礼を受けて信仰の受容を確認する。前回も指摘したように，それまでは多少の悪ふざけも大目に見られるのである。この間の事情は『プラウド』で，ジェイクが妹ケティに対してする次の発言が明らかにしている――「大人たちは礼拝の集まりのあとで作物のことを話しているふりをしながら，僕たち子供のことを話しているのさ。みんな『若いうちに好きなことをさせて，うっぷん晴らしをさせてやらなきゃいかん。洗礼を受けて，結婚したら死ぬまでアーミッシュの決まりに縛られるんだからねえ』なんて言っているのさ」（池田智訳）。次いでジェイクは声をひそめて，年を取った人たちだって悪いことをすることもあり，それでいて皆の前で反省を示さない，とも述べている。つまり老若の別にかかわらずアーミシュも同じ人間だということであり，『プラウド』が児童向け読み物であるからと言って綺麗ご

とで済ませていないところがいい。若いアーロンなど，すでに洗礼を受けた身で，ケティの姉ナオミとの結婚の予告まで終えていながら，それから1週間しか経たない日曜日に，男の子たちを相手に馬車で競争をし，両脚を折るという事故を起こして入院している。暴走族も顔負けである。アーロンはケティの兄イーライの友人で，イーライがタバコを喫ったり，映画を観に行ったり，髪の毛を短く揃えたりしているのは，このアーロンに唆されてのこと，とケティの母親は見ている。洗礼を受けてからは悪いことはしていないとナオミがかばうのだが，それはこの男を意中の人と決めているからである。母親は「でもねえ，アーロンが今のようになるにはずいぶん時間がかかったのよ。かけごとをしたり，馬車で競争したりね」と言う。だが，洗礼を受けたからと言って，いたずら気は納まるものではない。果たしてアーロンは文字通り暴走して骨折事故を惹き起こした。ナオミがこの男と親しくなったのは，前述した歌の会を通じてであろうが，話がその説明を飛ばして先へ進んでしまったのは，スピードを出し過ぎたせいか，またもや脇道に入ったせいだろうか。

S－3　　ませた訳知り少年ジェイクはまだ11歳ながら，16歳になってデート用の馬車を買ってもらったら，イーライ兄さんよりもっと磨きをかけた象牙と真珠貝で造った輪飾りを馬具に取りつけるんだと，今から計画している。このへんも自分の車にいろいろ細工をしたがる外界の若者と選ぶところはない。兄イーライはガール・フレンドのサラと一緒に歌の会に出るようになって1年になる。「歌の会」（*Singen*＝singing）は隔週の日曜日，礼拝の会場として農家が回り持ちで提供する巨大な納屋で夕方から行なわれる。一方の側に男子が立つと，反対側に女子が立ち，昔の讃美歌集『アウスブント』や新しい讃美歌集に載っている曲を唱う。あるいは共にすわってプレッツェルやポテト・チップを食べたり，謎ときなどのゲームをしたりする。それからフォーク・ダンスをするが，集会に遅刻するとお目当ての相手を選ぶ機会を逸することになるというから，基本的にはペアで踊るのを目的とする集会なのであろう。このとき鷗外流に言えば男女で親嘴をするのが恒例で，しかも他人の前でこれをするのは歌の会に出席す

る時期に限られるようである。結婚すると，ひとまえでは互いにしないばかりか，自分の子供にもしないものらしい。こういう屋内集会のほか，屋外集会をすることもある。たとえば陽気のいい時節ならば，空地に止めた2台の馬車のあいだにネットを張って，男子はバレーボールに興じたりする。女子は近くに集まってお喋りをしたり，男子にレモネードやプレッツェル，パイなどを差し入れしたりする。主としてこのような機会を通じて交際相手がしぼられてゆくわけだが，まだティーンエイジャーの裡はもっぱら馬車によるダブル・デートが行なわれる。その場合，馬車は2人乗りなので，しばしば女の子が男の子の膝の上にすわることになるが，言わばオープン・カーであるため，文字通りオープンな交際をするほかはない。歌の会には150人から200人も集まるというから，集団見合い大会のようなものという見方をすることもできる。屋外でするバレーボール競技のような場合は「ホップ」(hop) と呼ばれて，比較的小さな規模の集まりである。受洗し結婚して大人の仲間入りをするまでの比較的自由な時期を，アーミシュの言葉で「ルームシュプリンガ」(*Rumspringa*＝running around) と言い，若者たちはさまざまなグループに所属して思春期を楽しむ。グループにはそれぞれ愛称がついていて，たとえば「カーディナルズ」や「チカディーズ」は保守的だが，「アンティークス」は名前に似あわずリベラルで，自動車の所有を認めたため結局アーミシュ旧派から離脱したとか。アーミシュの生き方は思いのほかダイナミックである。

S－4　馬車によるデートを通じてステディな関係が固まるので，この馬車は「コーティング・バギー」(求婚馬車) と呼ばれ，『目撃者』でもダニエルがこれに乗ってレイチェルに会いに来る。そのレイチェルは19歳のときに，今は亡きジェイコブから交際を申し込まれるまで，馬車で街道に出ることがなかったとされているが，アーミシュの女としては異例である。ふつう手綱さばきでは男に劣らぬ者が多く，農繁期には6頭立ての耕耘機や草刈り機を操って男たちを助ける妻も珍しくないからである。レイチェルの場合は，前回も説明したように，15歳のとき両親と弟が乗っていた馬車がトラックと衝突して，3人とも死んでしまったので，悲しい記憶

と繋がる馬車には近づく気になれないのだった。そういう事情もあって，『目撃者』に求婚馬車への言及は以上の2箇所しかない。それは兎も角，歌の会などで気に入った相手が決まると，男は馬車で家まで送ってゆく。そのうち家を訪ねてもよいとなれば，男は夜おそく家々が寝静まってから彼女の家を密かにおとずれる。このあたりのいきさつは『プラウド』に活写されている。アーロンがナオミの部屋の窓に懐中電灯の光を投げかけて自分が来たと合図をしている。懐中電灯というところがアーミシュにしては現代的で，古典的方法としては小石やトウモロコシの粒を当てたものである。彼女はそっと台所に行って戸を開け，男を迎え入れて，そのまま台所でふたりだけの幸せな語らいの時を過ごす。世界の誰も知らぬ秘めやかな楽しいデート。と思いきや，両家の親は皆知っているのである。なぜならば，馬車で出入りすれば音で分かるだけでなく，これはアーミシュ村で代々続いてきた習俗だからである。ただに承知しているばかりか，ふたりがデートを重ねているあいだに，両家の親は当人たちの知らないところで，持参金のこと，農場の購入，新居の建築，家族用バギーの注文などについて綿密な相談までしている。いや，結婚の準備はこの時が初めてではない。アーミシュの家では子供が生まれたときから準備が始まる。子供が1歳の誕生日には将来新居で使う食器類がプレゼントされるというから驚く。実に気の長い話である。その後，男の子は農機具や大工道具など，女の子はテーブルやベッド・カヴァー，裁縫道具や台所道具などをもらう。アーミシュ社会は伝統的農村の例にもれず，確固たる男女役割分担の仕組みで生き残ってきた。『プラウド』の例でみると，クリスマス・イヴに，11歳のジェイクが父親からいくつか道具類をもらい，ふたごのケティは夏用台所から床を引きずって出されてきた「お嫁入り道具箱」(dower chest) をもらっている。用途は日本の長持，または韓国の「婚需函」(ホンスハム) に当たるであろうが，ただ後者は余りにも拵えが洗練され過ぎて道具としては象徴的になってしまったので，むしろ色など違うところはあるが実用的な「半櫃」(パンダジ) を想起するとよいであろう。ちなみに，これは京都の高麗美術館に展示されている。本稿執筆中 (1996年2月

12日）に逝去された司馬遼太郎氏，その他の肝煎りで故鄭詔文（チョン・チョムン）氏が夫人と共に創立したミニ・ミュージアムである。それは兎も角，ケティがもらった箱は父と祖父とが密かに造っておいてくれたもので，地色をブルー・グリーンに塗った上に，前面，蓋，両脇のデザインとして，ディステルフィンクという鳥と，赤いチューリップの花とを配した，色彩効果の鮮やかな仕上がりになっていた。

S－5　前掲デザインについては，アーミシュの本質にかかわることなので，些か説明を要する。まず「ディステルフィンク」（*Distelfink*），訛ってディッセルフィンクという鳥は，英語に直訳すればスィスル・フィンチ（thistle finch），つまりアザミの実を食べるフィンチということになる。古い独和辞典には「花鶏（アトリ）属」，フィンクは「鷽（ウソ）の類」と出ているが，新しい小学館『独和大辞典』はディステルフィンクを「ゴシキヒワ」としており，こちらの方が精確なようである。それを小学館『日本大百科』に見れば，次のように説明されている。

> ヨーロッパから小アジア，北アフリカにかけて分布し，北方のものは南へ渡って越冬する。北アメリカにも移入されて，少数が野生化している。全長約一三センチ。赤，黄，白，黒などで鮮やかに彩られた美しい小鳥で，鳴き声のよいこともあって，ヨーロッパでは飼い鳥として賞用された。日本でもキンレイチョウ（金鈴鳥）とよばれて輸入されたことがある。（中略）北アメリカにもともと分布し英名が同じ goldfinch がいるが，これは同属の別種で，アメリカゴシキヒワまたはオウゴンヒワの和名でよばれる。

姿形は『ブロックハウス百科事典』の「シュティークリッツ」（*Stieglitz*）の項目に美しいカラーの挿絵で見ることができる。少なくともくちばしのあたりに美しい紅がさしているスズメ目アトリ科の鳥という点では，日本のウソの雄に似ているとは言えよう。琴引鳥とも呼ばれるウソは，俳句では春の季語で，「鷽の声ききそめてより山路かな」（浜式之）がよく引かれるが，音が嘘に通じるところから正月，作り物による鷽替えの神事にも利用される。他方，ペンシルヴェニア・ダッチ・カントリーで

は，ゴシキヒワとチューリップとをハートやクローバーの葉の形と共に円の中に組み合わせて，紋のようにデザインしたものを広い外壁にいくつも並べて描いた納屋が目にとまる。この紋にはさまざまな種類があって，それぞれ名前がついており，「ヘクス・サイン」(hex sign) と総称される。ヘクスは魔力の意だから，サインは言わば魔除けなのである。ヒワは幸運の象徴で，赤いチューリップが3本組み合わされているのは三位一体による信仰を表徴するものと言われている。中でも「ラヴ・ロマンスと結婚のサイン」は，円の中央にふたつのハートが相寄る形で並び，その上方に2羽のヒワが向き合い，下方に3本のチューリップが山の字形に繋がっている。こうしたサインは観光客向けに売られる本の栞やキルトなどに使われているが，問題はアーミシュとの関係である。前回も説明したように，「ペンシルヴェニア・ダッチ・カントリー」とは，さまざまなドイツ系小教団の移民の子孫が住んでいる地帯を指すきわめて緩やかな名称で「アーミシュ・カントリー」と同義ではない。巨大な納屋，サイロ，風車などから成る農園を見たからとて，アーミシュと即断してはならない。アーミシュは信心深いがゆえに反って縁起をかつぐことはないと言われ，比較的制約の緩いメノウ派でもないらしい。そうだとすると，例のケティがもらった箱のデザインはどう解釈したらよいのか分からなくなる。そもそもケティの家は旧派（オウルド・オーダー）だと物語の初めの方で明らかにされ，ゲイ・ダッチとは違うむね強調されていた。その上，物語に一貫しているのは赤い服，赤いロケットなどに対するケティの根強い関心の描写で，それは赤が禁じられているからこそである。にもかかわらず，物語に出てくる納屋は選りに選って赤く塗装されているし，刺繍には赤い糸を使っている。何かそこに弁別の原則があるはずだが，未だそこまで詳細を究めた資料は寡聞にして知らない。

S－6　話の本筋に戻れば，恋人たちは密会中であった。いずれふたりが結婚の意思を固めると，男性は牧師の手伝いをしている人（Deacon）のところに行って，意中の女性と結婚したいむね報告をし，仲人として相手方の父親に，と言うことは実質的には母親にも，許可を乞いに行っても

らうよう依頼する。ところで，このディーコンを「助祭」と訳す例を見かけるのだが，それはカトリック用語とするのが通例で，プロテスタントでは「執事」とする。だが，執事では何となく貴族の召使い頭のような語感を帯びていて，アーミシュの場合に似つかわしくない。さればと言って他に適当な訳語も思いつかず，無理に作ることもないから，唯ディーコンとしておこう。ちなみに，キリスト教国でない日本では「神父」と「牧師」との区別も定かでない例が多く，たとえばメルヴィルの『モウビ・ディック』に出てくる「ファーザー・マプル」は長いこと「マプル神父」と訳されていた。「ファーザー」なる冠称を旧教の司祭に限るようになったのは，20世紀に入ってからだということである(*OED*, s. v. Father, sb. 6. e.)。なお，今はひとまず「牧師」としている名称は，原書では「ビショップ」となっていて，これは旧教では「司教」であるから「司祭」(プリースト)，つまり神父さんの上の役職であるが，新教では「主教」または「監督」と訳すのが通例である。ただし，前者はギリシア正教やイギリス国教会（日本では聖公会）の高位聖職者を指すのがふつうで，後者は旧教の司教に当たるというから高位の聖職で，階級制度のないアーミシュには似つかわしくない。さればと言って「執事」の場合と同様に「監督」では映画・スポーツ・工事現場・試験・親権などとしか日本語の語感ではイメージが繋がらず，宗教的イメージが湧かないので困るが，これまた無理に作るわけにもいかないから，今回は『プラウド』の邦訳に従って，一般に通りのよい「牧師」としておく。もっとも，前回『目撃者』を取り上げてレイチェルの身の上を説明したときは，父親の身分を「監督（Bishop)」としたのだが，それもひとまず邦訳に従ったわけである。それはさて措き，アーミシュ・カントリーの各地区には牧師１名，説教師（プリーチャー）2，3名，ならびにディーコン１名がいる。いずれもクジ引きで選ばれた無給の役職であって，職業的聖職者ではない。

S－7　仲人を頼まれたディーコンは牧師の許可のもと女性の家に出向き，両親の承諾を得る。『プラウド』では，ケティのおじいさんがディーコンをしているとされており，アーロンは当然この人のところに行ったは

ずである。ナオミはこの人の孫だから，事情はとうに知れている。アーミシュの結婚は比較的農閑期の11月にすることが多い。結婚式の2週前の日曜礼拝の折に，牧師によって結婚の予告（banns）が行なわれる。公示された結婚について異議の有無を問うためであるが，これは何もアーミシュの場合に限る制度ではない。ところで，予告と結婚式とのあいだが2週間であるのは，礼拝の集会は隔週に行なわれるからである。日々きびしい労働に勤しむアーミシュは礼拝のない日曜日に，自宅で骨休めをしたり，友人知人の家を訪ねて親善をはかったり気分転換をしたりする。アーミシュは何かというと集まっては，話をしたり旨いものをたっぷり食べたりするのが大好きな人たちなのである。礼拝の集会にしてからが例外ではない。礼拝には赤ん坊も含めて地区の全員が参加する。例外は病人と，結婚の予告がある日曜日なら花嫁になる予定の女性のみである。当の女性は朝9時から午後1時頃まで続く礼拝のあいだ，自宅で待機していなければならない。礼拝が終わると，昼食と社交の時間に移ることになるが，女性は花婿になる予定の男性が馬車で迎えに来るから，一緒に会場の農園に急行する。到着したふたりは皆にひやかされながら歓迎される。長く並べられた食卓には，前日から準備された食べ物や飲み物が満載されているので，一同は陽気に食しかつ論じ，論じかつ食す。『プラウド』でも，ケティは食べに食べて「そんなに食べたら，食べたものが耳の穴から出てくるわよ」と母親からたしなめられたほどだった。礼拝に集まった人の馬車が約30台と言っているところをみると，独身者用と家族用とで乗員数が異なるとしても，他の資料にみる参加者数を勘案すれば，約80名が食事をする一大社交場と化している様がうかがわれよう。

S－8　結婚の予告がなされてからは，男性は晴れて昼間に女性宅を訪問することができる。いや，もう女性の家に来て一緒に生活を始めるのである。骨折のため結婚が延びていたアーロンも，2週前から同じようにしている。男はこのときから口ひげと頬ひげとは剃り，顎ひげだけを生やす。独身の男は全部ひげを剃るから，ひげが既婚者の目印になるわけで，長寿の男ほど長い顎ひげを誇ることになる。もっとも，アーミシュは自慢

はしない。予告から結婚式までのあいだ，新郎になる男は忙しい。馬車であちこち出かけては，200名にものぼる人たちに結婚式の案内をしてまわると共に，人数分のもてなしをするに必要な食器類や調理用具などを借りてまわらなければならず，また調理の手伝いをも頼まなければならないからである。アーミシュ社会では，こうした依頼を受けるのは極めて名誉なこととされている。料理の準備は前日の朝早くから，30人くらいの人手で始められる。結婚式の礼拝は朝8時半か9時ころから始まり，4時間くらい続く。一同でグレゴリオ聖歌に似た響きの讃美歌を唱う。もちろん，楽器を使わないから，アカペラである。説教は聖書外典（Apocripha）の「トビト書」(the Book of Tobit）に基づくことが多い。新郎新婦による誓いの言葉に類するものはあるが，キスはなく指輪交換もない。男は顎ひげで，女は白エプロンから黒エプロンに替えることにより，既婚者であることは一目瞭然になるし，前回も指摘したように装飾品は虚飾として斥けられるからである。もちろん，偶像禁止だから記念写真もない。式が終わると昼食と夕食とがふるまわれる。したがって，式と披露宴とで1日がかりになる。日本でも昔は，地方により2日がかり3日がかりは珍しくなかった。例にたがわず，アーミシュの食べ物は盛り沢山である。数種のスープ，七面鳥，ダック，チキン，ポーク，ビーフ，ソーセージ，10種類の野菜，少なくとも25種のデザート，パンなど。言うまでもなく，みな自家製である。トリ類は慣習により前日，新郎になる男性が首を切り落としたものが使われている。こういう特別な場合のみならず，アーミシュはふだんから腹いっぱい食べる。しかも甘いものは飽くまで甘く，女たちの集まりでアイスクリームだけでも5スクープくらい盛り付けたものをおかわりするほど食べるが，それでいて太らないのは，日々の肉体労働で消耗するからにほかならない。『プレイン』の著者はアーミシュの砂糖消費量に驚いているが、糖分の制限だの，ダイエットだの言う者は，体を動かさずに生きている証拠であろう。ところで，昼食と夕食とのあいだ，および夕食から夜中まで何をして過ごすかは，説明をしだすと際限もなくなるので，老若男女がそれぞれ楽しげなことに打ち興じるとだけ言っておこう。

S－9　結婚式と披露宴とが済むと，新婚夫婦は馬車に乗って式と祝宴とに来てくれた人びとの家に挨拶まわりをすると共に，遠隔の地に住むがために来られなかった親戚や友人たちをも訪問する。訪問すべき家が多いので，ひとまわりするのに１か月以上かかることも珍しくない。しかも行く先々でお祝いの品が贈られるので，旅行から戻ってきたころには新家庭の必需品はみな揃うことになる。ずいぶんと実利的な新婚旅行である。戻って来る家は，両親が購入してくれたか，村の人たちが共同で建ててくれたもので，年が明けて春になれば直ちに農作業を始める態勢が整っていることになる。アーミシュの相続制度を九州大学の大原長和教授は次のように説明している。

> 両親が年老いても，その家や農地が売却されてしまうことは殆どない。理論的にはそれは無限に（ad infinitum）その家に留まるべきものであり，末子または最後に結婚した子供に相続される。すなわち，そこには家産制度（Homestead）的思想があり，末子相続制（Ultimogeniture）が行なわれていることが注目せられるのである。

アーミシュの若者はだいたい男は22歳，女は20歳で結婚し，子供の数は７，８人，時には12人かそれ以上の家も珍しくないと言われるが，現世の権威には服従しないので国勢調査が行き届かず，米国商務省の統計でも正確な人口などが把握されていない。ジョン・A・ワシルチックが著した最新のアーミシュ案内書によれば，人口は約12万と推定されているから，アーミシュはますます増加していると分かる。つまりは「生めよ殖えよ地に満てよ」（創世記１：28）と神が祝福と共に命じた教えを守っているからであり，そうすると当然のことながら避妊や妊娠中絶はもってのほかということになるが，後者は論外としても前者は何らかの方法で行なわれているようである。前回も説明したように，『目撃者』でレイチェルは義兄に当たるメノウ派の医師が処方してくれた避妊薬を服んでいた。別のアーミシュ案内書の著者ルース・フーヴァー・ザイツ（前回の参考資料参照）によれば，女性ゆえに知り得たのであろうが，アーミシュの既婚女性の内に

は地元のカトリック系病院が勧める「自然の方法」を用いる者がいるという。さもなければ，いかに土地が広大なアメリカ大陸といえども，次々と子供に農地を持たせて独立させてゆくには無理がある。そもそもペンシルヴェニア州ランカスター郡からオハイオ州，インディアナ州へと居住領域が飛び地的に拡大し，遂に北はカナダのオンタリオから南はラテン・アメリカやカリブ海の島にまで勢力範囲が伸展したのは，元のアーミシュ・カントリーの周囲に他の教派の人びとや一般の人びとの居住領域や産業地域が押し迫ってきたからなのであった。もはや元のアーミシュ村がスプロール現象を持続する余地はなくなったのである。

S-10　アーミシュといえども聖人ではないから，求婚時代に「一線を越える」ことがあっても何ら不思議でない。「いいですか，ぼくらはアーミシュである前に人間なんですよ」とは，あるティーンエイジャーの言である。そうした破戒行為にアーミシュは柔軟に対処する。つまり結婚してから過ぎし日の「あやまち」を牧師に告白すると，ふたりは「6週間の破門」になるだけで元の身分に復帰するのである。もっとも，以後の戒律違反には数段厳しく臨む。もしも『目撃者』のレイチェルが「イングリッシュ」の刑事とのつきあいを公に咎められていたならば，自宅の「外では氷の上，内では熱湯の中」と形容されるような待遇を受けていただろう。ただ，そうは言っても，最近は旧派アーミシュも「忌避」のペナルティを寛大に適用する傾向にあるという。それはさて措き，結婚をすればふつう子供ができるが，アーミシュは出産にあたり分娩促進剤も鎮痛薬も使わず，帝王切開もしない。『プレイン』の著者は妊娠したときラマーズ法の講習を受けたが，最初の陣痛が始まったら麻酔ガスを頼んだという。ところが，アーミシュの妊婦13人の出産に立ち会った際，産婆は足のツボを指圧して楽にさせ，誰にも叫び声を出させずに分娩させたと伝えている。それどころか，医者から帝王切開が必要だと言われた「イングリッシュ」の妊婦に頼まれて，自然分娩で正常児を出産させたのである。やがて子供が学齢期に達すれば，8学年までの昔ながらに教室が一つしかない村の学校に通わせる。クエイカー教徒の詩人ジョン・グリーンリーフ・ウィッティア

ー（John Greenleaf Whittier, 1807-92）が「小学校の頃」（"In School-Days"）で謳った当時とほとんど変わらぬ学校風景である。子供たちは皆ペットを飼っており家畜もいるから，学校で性教育をする必要もない。『目撃者』で11歳のサミュエルは出産間近のウサギを学校に連れてゆく。仔ウサギが生まれるのを皆で観察するためだという。生まれた中に白いのが混じっていたら父親は美しい白の雄だと言っているから，遺伝の基本も承知しているわけで，それ以上メンデルなどという外国科学者の名前まで試験のためにおぼえる必要はない社会なのである。

［結　論］ともすれば，アーミシュは旧弊を墨守するのみの「超近代的」存在と見られがちである。近代に容易になじまない点で，ニュートラルな意味において「超近代」であることは確かであるが，しばしば西欧的「近代」なるものを基準として疑うことを知らず，アーミシュは外界の変化にどう対応すべきかを選び取っているのだという実態を知らぬ，むしろ外界の側の無知を露呈した偏見である場合が多い。アーミシュは生き残りを賭けているがゆえに，外界の事情には驚くほど通じている。その上で，変化しても一向に構わないと認めるところでは変化をゆったりと受容するが，別に変化する必要はないと信ずるところでは変化しないまでの話なのである。「時代おくれ」などという外野の声は何の判断基準にもならず，ましていわんや恥ずべきこととともされていない。

総じてアーミシュは衣食住のいずれを取って見ても，実質的に豊かで安全な暮らしをしているばかりか，精神的にも安定した生き方をしていて，高度経済成長により豊かになったはずの日本人にとって「現代のアンチテーゼ」を示す存在たるを失わず，本論で取り上げた3作品，就中，『プレイン　アンド　シンプル』は再読三読すべき価値があろうと信ずる。

このほか関連分野として，今から30年前に大学英語教科書で取り上げたことがあるハターライトや，更にはクエイカー，シェイカーなどについても論及したかったのだが，もはや紙数が盡きた。

以上の論考（補遺）をもって学生の質問に対する解答としたい。

参 考 資 料（補 遺）

第1次資料

［文学作品］

Bender, Sue. *Plain and Simple : A Woman's Journey to the Amish.* Illustrations by Sue Bender and Richard Bender. New York : HarperCollins [*sic*] Publishers, 1989 ; paper, 1991.

Jordan, Mildred. *Proud To Be Amish.* Illustrations by W. T. Mars. With Glossary. New York : Crown Publishers, 1968.

Kelley, William, and Earl W. Wallace. *Witness.* New York : Pocket Books, paper, 1985.

第2次資料

［研究書］

池田智『アーミッシュの人びと――「従順」と「簡素」の文化』，サイマル出版，1995年。

［論　文］

Berry, Wendell. "The Amish." *The Unsettling of America : Culture & Agriculture.* San Francisco : Sierra Club Books, 1977. pp. 210-17.

山本晶「現代のアンチテーゼ――米文学にみるアーミシュの生き方」，『藝文研究』（藝文学会）67（1995），289-316頁。

［案内書］

Amish Cooking. New York/Avenel, NJ : Crescent Books, 1993.

Denlinger, A. Martha. *Real People : Amish and Mennonites in Lancaster County, Pennsylvania.* 3rd. ed. Scottdale, Pa. /Waterloo, Ontario : Herald Press, 1986 [1975].

Pennsylvania Dutch Country, Lancaster County/Free Map & Visitors Guide. Lancaster, Pa. : Pennsylvania Dutch Convention & Visitors Bureau, 1994.

Wasilchick, John V. *Amish Life : A Portrait of Plain Living.* Photogra-

phy by Jerry Irvin. New York : Crescent Books, 1991.
ジョセフ・リー・ダンクル『ペンシルバニア・ダッチ・カントリー／アーミッシュの贈り物』，主婦の友社，1995年。［翻訳書の形式に非ず］
［記　事］
ジェニファー・ラッチ「［アーミシュ共同体の］「安全ネット」から離れて／脱会して得たもの失ったもの」，『ニューズウィーク日本［語］版』1995年5月3-10日号，28頁。
ケネス・ウッドワード「［アーミシュの］コミューンに学ぶ子育て法／自分の信念と社会の信念が対立したとき，親は何をなすべきか」，同上，31頁。［共に英語版の記事がなく日本語版独自に仕立てられたもの］
グラビア「アーミッシュの人々」，Photography by Antonio Mari.『週刊朝日』1996年2月9日号，153-57頁。［目次掲載のタイトルは「アーミッシュの人々の「超近代的」暮らし」］
三輪洋一郎「心洗われ，その後で」，『東京新聞』1990年4月25日夕刊。
［その他］
Allard, William Albert. “The Hutterites, Plain People of the West.” Photography by the author. *National Geographic* July 1990 : 98-125.
Caldwell, Erskine. “[Hutterite Commune,]Huron, South Dakota.” 大橋吉之輔・山本晶編注『Around About America』，金星堂，1966年。pp. 45-51.［米国版，1963, 1964］
Clinch, Minty. *Harrison Ford : A Biography.* London : Hodder & Stoughton, 1988.
〈邦訳〉ミンティ・クリンチ『ハリソン・フォード』（水野みさを訳），近代映画社，1989年。［第13章「新たなる挑戦『目撃者』」，同書297-312頁］
Gascoigne, Bamber. *The Christians.* London : Granada Publishing, 1977.
〈邦訳〉バンバー・ガスコイン『ザ・クリスチャンズ』（徳岡孝夫ほか訳），日本放送出版協会，1983年。
〈放映〉「文明と信仰――キリスト教二〇〇〇年」，NHK教育テレビ

「海外ドキュメンタリー」シリーズ，自1983年4月9日，至8月6日。
Peskov, Vassili. *Ermites dans la taïga.* Paris : Actes Sud, 1992.
〈英訳〉 *Lost in the Taiga : One Russian Family's Fifty-Year Struggle for Survival & Religious Freedom in the Siberian Wilderness.* Tr. by Martin Schwartz. New York : Doubleday, 1994.
〈邦訳〉 ワシーリー・ペスコフ『アガーフィアの森』（河野万里子訳），新潮社，1995年。［ロシア分離派一家の苦難の歴史］
Rideman, Peter [1506-53]. *Rechenschaft unserer Religion, Leer und Glaubens von den Brüdern so man die Hutterischen nennt aussgangen.* Philipa Vollandt, 1565. *Rechenschaft.* reprint ed. Farmington, Pa. : Plough Publishing House, 1988.
〈英訳〉 *Confession of Faith.* Plough, 1970.
〈邦訳〉 ペーター・リーデマン『フッタライト派信仰告白』（榊原巌訳），平凡社，1977年。
Sprigg, June, and David Larkin. *Shaker : Life, Work, and Art.* Photography by Michael Freeman. New York : Stewart, Tabori & Chang, 1987 ; London : Cassell, 1988.
West, Jessamyn. *The Friendly Persuasion.* New York : Harcourt, Brace & World, paper, 1968 [1945].
〈邦訳〉 ジェサミン・ウェスト『友情ある説得』（蕗沢紀志夫訳），三笠書房，1956年。［ゲイリー・クーパー主演で映画化された，クエイカー教徒一家にからむ古典的小説］
大内一雄「家普請は村内総出で／労力の無償提供と入会地の平等利用」，『増刊　現代農業』（農山漁村文化協会）1996年①号，「すべては江戸時代に花咲いた／ニッポン型生活世界の源流」，42-43頁。
榊原巌『アナバプティスト派古典時代の歴史的研究』，平凡社，1972年。
鈴木孝夫『人にはどれだけの物が必要か』，飛鳥新社，1994年。
東城百合子「健やかに生きる」，『こころの時代』，NHK教育テレビ，1996年3月1日。

［付記］　作品の原典入手にあたり，あるいは一部資料につき披見の機会を得るために，次の方々に協力して頂いた。（五十音順　敬称略）

伊東暁代　粋川羔　久我俊二　佐藤光重　清水雅恵

志村正雄　西村智　藤村洋子

ディステルフィンクの同定などにつき，鈴木孝夫名誉教授からは示唆に富む鳥類学的知見をご教示頂いた。

また韓国の木櫃などについて，野村伸一教授および高麗美術館研究所主任研究員の金巴望（キム・パマン）氏のご教示に与った。

茲に記して各位に深甚なる感謝の意を表する。